

令和 4 年 6 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13929

研究課題名（和文）社会運動における排除・周縁化のメカニズム 活動従事者の日常に注目して

研究課題名（英文）Social reproduction and the limitations: inclusion and exclusion of social movements in Japan

研究代表者

富永 京子 (Tominaga, Kyoko)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70750008

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、弱者の救済やマイノリティの社会的包摂を訴えるはずの社会運動において、排除や差別を生み出すような作法や規範が生成・再生産されてしまうメカニズムを明らかにする。本研究は日本の社会運動をめぐる規範や作法が、労働や家庭での生活といった「日常」と、人々が集まって行うデモなどの組織的な「社会運動」を往還する中で形作られると想定し、分析を行った。

研究の結果、社会運動の規範は運動従事者が過ごす日常や参加する社会運動に加え、社会運動従事者が運動の現場に向かうまでの「移動」やメディアの注目を浴びる「公的機会」の中で生成されることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本におけるデモ参加率はおよそ5%と、先進国内でもかなり低いことが知られている。また、警察による規制も厳しい。しかし、日本は組織的な社会運動が困難な一方で、生協運動や消費者運動に代表される、日常を通じた活動が非常に盛んであるという珍しい社会である。日本の事例を検討しながら「日常」を「社会運動」と対比させ、両者の往還を検討しながら「規範」「作法」を検討する申請者の試みは、現代に至るまで「社会運動に厳しい社会」と言われてきた日本の社会運動参加・政治参加の有り様を解き明かす上で重要な意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study makes clear the processes that generate exclusion and discrimination are generated and reproduced in social movements which are supposed to include minorities. This study analyses the norms and practices of social movements in Japan as the dual process of both everyday routine and collective action like demonstrations. The research revealed that norms of social movements are generated in not only the daily lives of activists and collective actions they engaged but also in the transportation processes to the site of the movement and the media appearances of themselves.

研究分野：社会運動論

キーワード：社会運動 排除 アクティビスト・アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、社会運動をめぐる排除や衝突が生まれる背景にどのような規範・作法が存在し、それが活動従事者の日常生活を通じて再生産されているのかを明らかにすることで、本来少数者の支援やマイノリティ保護に向かうべき運動が、さらなる排除や差別を作り出してしまいうメカニズムを明らかにする。

申請者は過去9年間、G7・G20 サミットや WTO 閣僚会議といった、世界各地で開催される閣僚会議の現場に NGO・市民団体・社会運動組織が集合して行う提言活動や抗議行動の調査をしながら、彼らが現地での政治活動だけでなく、食住といった滞在のプロセスにも政治的理念を込めることを検証してきた。閣僚会議の議論内容や政策決定だけでなく、例えば会議期間滞在する際にどのような宿舎を用意するか、少数派の人々に配慮した食事を提供するかといった点もまた、社会運動の重要な過程である。先行研究は閣僚会議への抗議行動の活動従事者同士の衝突を通じ、性や宗教、政治的な観点から興味深い衝突があることを明らかにしたが、特に申請者は日本の事例を検討した結果、欧州の活動参加者が提示する規範に対して日本側の参加者が過剰に適応してしまい、そのためにローカルな民族マイノリティや語学力が不十分な者が排除される構造を作り出すと主張した。

先行研究から、閣僚会議への抗議行動を通じて、規範の衝突や、特定の地域における規範を偏重する態度が見られ、その結果特定の活動従事者の排除が生まれることが分かる。しかし、先行研究はそのような衝突がどういった背景のもとに生じるのかを明らかにしていない。閣僚会議の抗議行動というイベントに反映される政治的理念は、活動従事者たちの家庭や労働を通じた日常生活に根強く支えられていると考えられる。そこで本研究では、活動従事者たちが政治的理念を諸々の行動にどのようにして反映させ、さらにそうした規範や作法は日常の中でどう学ばれるのかを、欧州と日本との比較調査のもと、社会運動従事者たちのコミュニティにおける他者との協働・相互行為を観察しながら検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、本来であれば弱者の救済やマイノリティの社会的包摂を訴えるはずの社会運動において、排除や差別を生み出すような作法や規範が生成・再生産される過程を、社会運動従事者たちの日常生活に対する分析を通じて明らかにすることである。

近年、ポリティカル・コレクトネスやジェンダー平等といった観点から、差別的な広告表現や公人の発言を指摘することで公正な社会を実現しようとする試みは国内外を問わず数多くあり、そのような活動に関する調査研究も増加している。一方で、このような試みは常に「何が正しいか」という課題をめぐって運動内外での激しい議論を伴う事が多く、集団内に亀裂を生んだり、インターネット上やマスメディア上において論争になることも少なくない。本研究の第一の貢献は、こうした論争や亀裂を生み出すそれぞれの認識がどういった背景のもとで形成されているかを丹念に検証する点にある。運動を形成する多数のアクターの中で「正しさ」がどのように作られるのか、彼らの従事する社会運動のみならず、日常の実践にまで立ち返りながら検討することで、学術的および社会的な貢献をなす。

先行研究は法律制定や意識変革といった社会・政治の変動を明らかにするために、デモや学習会、シンポジウムといった集合的に行われる社会運動、労働や家庭といった私生活を通じて従事される活動のどちらか一方を中心に検討し、その間にある連続性には注意が払われることは多くなかった。これは、社会運動論が組織的活動の発展・持続・成功に寄与する理論として、あるいは「人々はなぜ社会運動に参加するのか?」という問題意識のもと、特定の運動に参加する人々の持つ集合的なアイデンティティを考察する理論として発展したためである。しかし、集合的に行われる社会運動は私生活を通じて培われた価値観により形成され、私生活もまた社会運動の影響を被り変容する。社会運動の場において顕著に見られる規範の衝突や排除のきっかけが我々の日常にこそ潜んでいるからこそ、社会運動論は活動従事者の生活と社会運動、両者を検討する必要がある。本研究の第二の独自性は、家庭や労働という日常と、デモや学習会という集合行動を間断なく往還しながら生活する人々のライフスタイルを検討することで、社会運動論の分析枠組を大きく刷新し、より精緻化する点にある。

3. 研究の方法

本研究は、社会運動の従事者たちが[1]日常的に、私生活を通じて政治的な理念と規範を実践・再生産し、またそれを[2]デモや政策提言といった集合的な社会運動へと反映し、異なる規範や作法同士の衝突・排除へと帰結するメカニズムを明らかにする。この過程を検証するために、本研究では社会運動従事者が集住するコミュニティ(オキュパイ・スペース、スクワット・スペースなど)を研究の対象とする。こうしたコミュニティを対象とする理由は、社会運動従事者複数人が食住をともにしており、生活実践を通じた規範・作法への適応や、相互調整や葛藤の過程を観察しやすいためである。

日本における社会運動従事者は、欧州の社会運動の理論や実践に強く影響されているため、本

研究においても日本国内のコミュニティならず欧州のスクワット・スペース等を調査し、そこでの活動参加者同士の交流や往来を重視した。彼らの日常と社会運動のほか、欧州の活動との交流がこうした態度を形成していると考えられるため、申請者は欧州と日本、双方における社会運動従事者の[1]コミュニティ・スペースと[2]社会運動を分析し、また両者を行き来する人々の交流を検討した。

4．研究成果

国内外のコミュニティを研究した結果、活動従事者たちのアクティビスト・アイデンティティは生活実践を通じて調整・強化されるが、本研究が見出した興味深い要素はむしろ、大規模な抗議行動に至るまでの「移動」や、メディアを通じて大勢の人々の前で話すという「公的機会」が、結果として社会運動従事者の日常に影響を与え、日常をめぐる運動的な規範の生成や再生産に大きな影響を与えるという点であった。

本研究は主として社会学（社会運動論）、政治学に貢献することを想定していたが、研究を続けるうち、人類学・観光学・地理学・歴史学とも問題意識を共有することが明らかになった。日常と集合行動とをめぐる社会運動が政治過程や社会意識のみにとどまるものでなく、より広い領域に影響を与えうる現象であると分かった点もまた、本研究の大きな成果であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 富永京子	4. 巻 5
2. 論文標題 社会学の社会運動論 隣接領域との関連か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新社会学研究	6. 最初と最後の頁 33-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kyoko Tominaga	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 Protest journey: the practices of constructing activist identity to choose and define the right type of activism	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Interface	6. 最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富永京子	4. 巻 33
2. 論文標題 若者文化における政治への関心と冷笑 雑誌『ピックリハウス』を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富永京子	4. 巻 22
2. 論文標題 「社会運動する若者」はどのように存在しうるのか？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会文化研究	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsutomu Hashimoto, Yusuke Kanazawa and Kyoko Tominaga	4. 巻 12
2. 論文標題 A New Liberal Class in Japan: Based on Latent Class Analysis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Economic and Social Changes: Facts, Trends, Forecast,	6. 最初と最後の頁 192-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Constructing Depoliticized Youth in the late 1970s: The Case of Youth Culture Magazines
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 What is the Role of Mass Media for Activists? : The Process of Forming the Activist Identity under the Gaze of the Media
3. 学会等名 Alternative Futures & Popular Protest, 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂本治也・金澤悠介・富永京子
2. 発表標題 過去の社会運動に対する否定的評価は政治参加にどう影響するのか
3. 学会等名 日本NPO学会第23回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 テレビに映ったのは研究者か、それとも活動家なのか：研究者活動家（Scholar-Activist）の目を通じたマスメディアと社会運動の「分断」
3. 学会等名 マス・コミュニケーション学会2021春季大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 環境危機と社会教育：小さな社会運動の背景にあるもの
3. 学会等名 日本社会教育学会2021年6月集会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富永京子・金澤悠介
2. 発表標題 抗議をいやがる理由～社会運動への肯定感・忌避感を規定する要因の研究～
3. 学会等名 日本NPO学会第22回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 反権力としてのパロディが「冷笑」に行き着くまで
3. 学会等名 日本社会学会第93回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Activists Seeking Authenticity in Social Movements: The Study of Activist Identity and Lifestyle Movement in Japan
3. 学会等名 EVF Discussion Workshop: Youth, Activism and Politics in Japan Today (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 The Study of Activist Identity and Protest Tourism
3. 学会等名 Social Movements after the Global Crash: Looking Back, Looking Forward (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Wagamama(selfishness): Barriers to Participation in Social Movement in Japan
3. 学会等名 University of Vienna Public Seminar (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Collective action by unradicalized youth: Practices of constructing and sharing the activist identity
3. 学会等名 Public Lecture in Friedlich-Alexander Universitat Erlangen-Nuernberg (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 社会運動研究とNPO 研究の差異を考える 社会運動論から考える参加と組織化(2)
3. 学会等名 第21回日本NPO学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 富永京子 (編著者: 出口剛司・武田俊輔)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 137-156
3. 書名 『社会の解読力<文化編>』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------